

## 近世禅林墨蹟の特長

横山文綱

## 一 墨蹟

禅宗の高僧の筆蹟を一般に墨蹟といっている。墨蹟という文字は既に鎌倉時代の仏日庵公物目録にその使用例を見ることが出来る。

今日墨蹟を古墨蹟と近世墨蹟とに区分している。古墨蹟とは桃山末期以前のものをいい、それ以後のものを近世禅林墨蹟といい、略して近世墨蹟ともいっている。

古墨蹟は今日、仏教史は勿論のこと美術史、書道史、茶道史上において、貴重な価値とせられ国の文化財として、国宝、重文に指定されているものもかなりの量に上っている。これらが今日禅家において重要視され尊重される理由として、第一に法の説示であり、第二に伝灯を裏付けるものであるとしている。

こういつた墨蹟が近世に至ると余り尊重されてはおら

ぬのが現況である。それは時代が若いために量が非常に多いからであり、世俗的経済的価値が低いということにある。然しこれらはやはり古墨蹟に劣らぬ貴重な宗教的遺産であり、これを研究し、或は保存して行くに十分の価値のあるものである。以下その特長について述べることにする。

## 二 形式上の特長

古墨蹟といわれる軸物の表装の形式は、その大部分が横軸である。この形式はよく注意すべき要素をもっている。これら古墨蹟の内容は、印状、法語、警策、尺牘、機縁問答書、遺偈、遺語、遺誡等に亘っている。これらは何れも師匠がその弟子等に与えたものである。これは師弟という個人的關係を示すものであるから、今日の如くこれを一般に公開して見せるといふ性質のものではなかつたのである。

これら墨蹟の大部分のものは始めは小卷子に仕立てられていたもので、弟子が自己の師を偲ぶ唯一のものとして、手箱の筐底に深くしまこんでいたものに相違ない。こういった性質のものが筐底から取り出され、改装されて鑑賞の対象として、公開の席に現れ始めたのは東山時代、即ち詩社の活動がようやく活発化する頃とされる。

しかしながら初期においては筆蹟の鑑賞ということよりも、祖師の筆蹟であるということがより重要視されていたようである。いずれにしても鑑賞という要素が加わってくると、その鑑賞に都合のよい形式に似合った状態が要求されて従来卷子であったものが、横幅仕立の軸物として再装される必要が出て来たと思われる。

軸物の表装の形式並に寸法は東山時代に完成を見ているが、仏画とか頂相は相当古くから表装されて、仏事祭典に使用されており、豎物の軸物は古くから壁面にかけて荘嚴に一役をかつていたものである。東山時代頃までは禅宗寺院はこれらの軸物を壁や屏風にかけていたようである。

足利義持が応永年間に造営した東求堂には床の間が作られたという。その頃の室町第や北山第には床の間に出来ていたのであろう。西本願寺所蔵の慕師絵巻（二三五

一）には、床の間に近い部屋の様子が描かれているが、形式的に床の間と見てよいか疑問である。床の間に形成された時期は室町後期ということになるのではないかと思われる。

床の形式が定まることによって、軸物の形式も必然的にそれに合うように形式が定ってくる。即ち横ものよりは豎ものの方が写りがよいということになる。豎ものの軸ものが需用となる時期は室町後期と見て行きたい。

近世において軸ものといえば、豎ものが一番数量的に多いのは床の間の形式からくると見てもよい。（その他に理由もあるが今はその必要がない）徳川期に入つて民生が安定し、生活が向上するに従つて、一般の町民が上流社会の建築様式である、書院造りを取り入れるようになった。こういった庶民生活の向上が墨蹟の需用という形に現れ、又宗教の大衆化活動が活発となるという二つの働きかけによつて下層に軸ものが滲透して行つたと考えられる。

至道無難禅師述、某家家訓（写本）には十二ヶ条の家訓が述べられているが、禅師は「是家を齊へ身を修るの大体なり」とされる。即ちお家繁昌のものは、修身にあるということが当時の社会通念であったことが解ると共に、修身は宗教によつてという働きかけが盛んになつて

行つたと見る一つの裏付けになると思う。

### 三 墨蹟鑑賞の一般化

日録等によって明らかなように、足利義政の頃より、五山の禅僧と武家、公家等が共に社交的、文学的遊興に耽つた詩会友社が盛んになる。義政以前の墨蹟の使い方は寺院の宗教行事の際にはこれをかけ、祖師の身代りとして齊会の中心的存在としていた。そういったものが詩会友社の集が隆盛になるに及んで、墨蹟が一步社会に進出して、詩の友社という文化的社会的場に登場せしめられるようになった。

谷信一氏の指摘するところによると、

「このような將軍家の友社やその他の友会は、宋朝禅の貴族化に伴つて生まれた宋元時代における宋元禅僧と貴紳文人の交友と、形の上では同じようなものだろうが、日本のそれは禅僧の教養によって指導されたことに意味があり、それだけ墨蹟の価値や比重が高くおかれたことは疑えない事実である。」

として墨蹟の一般教養に及ぼした事実を認めている。中村直勝氏は日本想芸史において、文化は上流社会より下流社会へ流れて行くものと、下級社会より上級社会に流れて行くものとの二つの流れがあるとされるが、この

墨蹟の鑑賞の流れは、高度の文化社会より下級の社会への下向という方向、即ち一般化へと発展して行くのである。このような墨蹟一般化の傾向が徳川期に至つて一斉に発達し普及したといつてよい。

註(1) 淡交増刊号日本の書七二頁

### 四 茶席よりの開放

茶席に墨蹟をかけて茶会を行うようになったのは、東山中期以後東山末期とされる。即ち津田宗達の茶会記に天文十八年(一五四九)四月五日に「きだう字懸テ」とあるのが、茶記に現れる最初とされる。天文より永祿、天正と時代が降るに従つて墨蹟の茶席進出は目立って多くなる。ことに大永六年に天王寺屋の津田宗達が参禅の師である大徳寺の古岳和尚より法名を授けられたということがあつて後、堺の納屋衆仲間の参禅が盛んになり、従つて参禅の師の筆蹟が尊重され茶席にも用いられるようになる。更に利休を始めとして、職業として茶を嗜む人々が出るに及んで、社会的地位の確立を計る手段として大徳寺の高僧に参禅をする。即ち師弟關係を保つことが極めて重要な事項になってくる。

禅文化三十四号三十五頁において浜本女史は「墨蹟尊

重の思想は茶道が生んだといつてもいいのではないかと  
 思います」と主張される。利休頃より茶席の構造が変り  
 席が暗くなるという理由もあって、暗くても見よい墨蹟  
 が茶とは離れない関係が生ずる。ことに元禄時代に至る  
 とこれが全盛期を迎えることになる。

今ここで注意されるべきことは、墨蹟が茶席専用のか  
 けものと見られるものが徳川期に至ると一般の町屋の床  
 にも掲げる様になったことである。

例えば時代は少し降るが白隠禅師は延命十句観音経靈  
 験記において、

「是の故に昨日御望もこれなく候処に、金毘羅秋葉の  
 宝号二幅書立て進覽致し候子細は、一昨日罷上り候  
 刻、殿閣の経営園林の奇観、寔に以て当時の御富貴重  
 疊至極の御事に見請奉り候。此上猶々御武運も長久に  
 御子孫も繁榮せさせ玉へかすと、乍陰祈り申計りの寸  
 志より存じ立ちたる追従に候。総じて書画掛もの等の  
 類は、縦令惠操が芦雁、趙昌が花、韓渚が馬、戴嵩が  
 牛等、数百軸掛ならべたりとも、唯暫時凡眼を悦ばし  
 むるのみにして利益すくなし。若し夫金毘羅秋葉の尊  
 号の如きは、表具致させ上段の床の間に掛け置き時々  
 に一絲の香を挟んで、合掌低頭せさせ玉ふ時は、火難  
 盜難、七難即滅、七福即生、武運を助け養ひ、御寿命

も長遠に、御家中は申すに及ばず、天下泰平、御当家  
 御代長久の祈りの為には、是に過たる大善行はこれあ  
 るまじくおぼえ侍り云々」

と申されるように、軸ものの普及とその鑑賞は一般化  
 されていたことを知る。又茶席より一般の床の間に進出  
 した掛ものは、火難盜難、七難即滅、七福即生、武運を  
 助け養ひ、御寿命も長遠に、御家中は申すに及ばず、天  
 下泰平を得る為に、その目的に合ったものが歓迎された  
 ものである。これは巾の広い人間生活の願いがこめら  
 れていた。近世の墨蹟はこういった人間臭の多い画賛も  
 のが一度に現れ出すのも一つの特長である。又その一面  
 にはその人間味を否定する厳しい宗教的示唆に富む法語  
 類も数多く世間に出て、宗教活動の補助に使われた。

徳川期に至って一面高度の文化的素養を要求する墨蹟  
 が世間に出たことは、当時の一般社会の文化が向上した  
 一つの証拠にもなる。

今、眼を図書の出版に向けた場合、慶長—元和—寛永  
 —慶安—寛文と年代順に見ると、年代が降るに従って、本  
 の種類と数量が急に増大してくる。中村直勝氏の指摘さ  
 れるところによると、寛永以前の出版は「技術は拙いが  
 ためによい図書」であり、「それが寛永期に達すると、図  
 書の出版という事が一つの企業として取り上げられた」

という。これは上流の文化が寛永期を基点にして、一般化、普遍化に転ずる。文化人の増加によって企業としても成立する様になるということである。

## 五 禅画の成立

禅画という新語が使用され出したのは最近のことである。禅画と呼ぶ対象及びその内容は何であるか判然としないものがある。鈴木大拙氏は「禅画を禅僧の専売特許のやうに考へるわけにはゆくまい」とされるが、禅僧以外の人々の作品も禅画といい得るとすると甚だ複雑なものになる。禅僧以外の人々が描く禅画は俳画の中に入れるべきものだと思う。基本的に禅画は禅僧の描いたもの、然も嗣法をした師家分上の禅僧の描いた画、絵には経験の無い素人の描いた画である。又たとい禅僧の描いた画でも専門画人と変らぬ程上手で、しかも精密な画は禅画の対象にはならぬと思う。

禅画は対象を上手に写生するというものではなく、心に捉えたイメージを率直に画に描き出すといったもので、作画の際に何々派かの画を習って画を描くものでもなく、全く精神的に捉えたものを画に表現したものに過ぎない。それは全くの抽象的絵画であるといひ得る。

幼児の絵を見ると幼児には写生というものが無い。丸

に点を打つただけで父であつたり母であつたりするのである。バスを描いて車輪の数を全部描いたり、乗客の足までを窓からはみ出して描いている。幼児はこういう表現が現実と相違しているという矛盾を感じることはない。それは主観的であるからである。

白隠禅師が鍾鬼の横を向いた顔を描いて、眼は横に向けてに体と同じ方向を向いているといった絵を平気で描いている処などは、幼児の絵画に等しいイメージを覚える。又雲門和尚の頂相を描いて、鐘声七条の公案の見処をそのままに描いておる。雲門を肉眼で見たことのない者が、どうして雲門の頂相を描くことが出来るか、それは雲門の仏法を捉えて、それを描き出すより致し方があるまい。そういった主観的な描出法を取るものが禅画である。

鈴木大拙氏は禅画が日本に出現したことについて、「これは日本人の性格の一面が禅を通じて出たものではなからうかと思う」といわれる。中国における禅の特質を今ここで論ずる意図はないが、中国禅の特長を指示問疑という、現実主義的性格にありとすると、これに對して、本朝禅の特質を考へる場合に、禅画の發生という特長より見て具象的唯心主義であるともいひ得るのではなからうか。

この禅画が世に現れ初めたのは何時頃かという点、色々問題があると思われるが、洞門の風外慧薫（二五六八—一六五四）より始まるとしたらどうかと思う。風外を頂点として沢庵、一絲、提州等が出て夫々優秀なる禅画を描いた。これが禅画の濫觴であると思う。

註(2)(3) 竹内尚次編「白隠」四十二頁

## 六 書風に就て

神田喜一郎氏は「中国書法の二大潮流」において「結局王羲之にはじまる流派と、顔真卿から発して東波、山谷において大成した流派、これが中国書道史における二つの大きな流派であります。（中略）こういう風にして中国の書道史は王羲之流と顔真卿流とが交互に隆替しつゝ展開しているのであります。」（同書、四十二頁）と指摘された。中国における書道の隆替は直に又日本の禅僧にも影響を与え鎌倉時代より室町時代に至る禅僧の筆蹟に可なり明瞭なる結果が現れている。初期の本朝禅宗教団の主流は、宋元の帰化僧によって占められていたので、故国における文化をそのままに日本に移している結果からである。然し日本僧の虎関は山谷を習ったことが知られておる如く、本朝僧も当時舶載されて招来された中国法

帖によって書を学んだものと思われる。

近世に入ると中国法帖を手本にして書を学ぶ傾向がすたり、本朝の書家の書を学ぶ風習に変化してくる。本朝の書家は中国の書風を一応学びこれを和様化して本朝人に教えたものである。

時代が降るけれども無著道忠（二六五三—一七四四）は能書家としても高名であるが、道忠は佐々木玄竜の書と、橋本仙圭の草書を学んだ。又白隠禅師は自作の伝記の中で「手迹学尊円養拙」といつている如く、尊円流（お家流）と寺井養拙の書を学んだのである。

佐々木玄竜は朝鮮の法帖を、寺井養拙は董其昌を学んだ。これは注目すべきことである。五山時代までは中国の法帖を手本として直接に中国風の書風を学びとつたものが、近世に入るに及んで一度本朝の書家が和風にこなししたもの学んだのである。これが近世における書風の特長となる。

その後更に南山古梁及び整頓和尚は夫々書道の流祖となり、法帖を作製してその書を習わしめるに至る。これは消極的に他の書を学ぶといったことよりは一步前進して、書の道を自ら開拓して他の人々に教えようという積極性への転換である点に新しい禅の働きがある。然し逆にこれを見ると世俗に流れ、宗教の本質より離れていく

今日の禅界の悪い一端が徳川の末期に既に現れていると見ても差支えはなさそうである。

以上において近世禅林墨蹟の特長を見たのであるが、これらの研究は新分野のものであり、目標となるような先人の遺産もなく、全く盲人の橋渡りに等しいものである。幸いに数多くの遺墨を布石としてこの分野を開拓したいものである。(文部省よりの協同研究費及び禅文化研究所よりの研究費による研究の一端である。)

追記、近頃「禅画」ということは、成立せぬとする一部の学者がある。その指摘するところは了解出来るが詳しいことは別記することにした。